

參考資料

ミーティング議事録

都市農山村共生対流調査ミーティング（第1回）議事録

日 時：平成 18 年 5 月 30 日（火）13：30～15：00

場 所：八尾総合行政センター

出席者（敬称略）：

< 八尾地区 >

八尾総合行政センター	高土
黒瀬谷交流センター運営委員会	林
みのり棚田の学校実行委員会	山西
富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊	早川

< 大広田地区 >

大広田環境づくり協議会	始良、寺田、小畠
-------------	----------

< 事務局 >

富山市農林水産部	木下、塚本
富山市環境部	辻、杉木
富山社会人大楽塾	柳原
エックス都市研究所	大久保

活動紹介

- 自己紹介も兼ねて、八尾地区及び大広田地区の各団体が取り組んでいる活動について、ご紹介いただいた。

黒瀬谷交流センター運営委員会

- 活動エリアは黒瀬谷地区である。
- 農産物の直売が最大の事業である。
- 月 1 回のペースで、豆腐づくりや味噌づくりも行っている。
- 現在、相当の時間と労力を掛けて、活動レベルを維持している状況にある。かつて、体験農園などの取組も試みたが、そこまで手が回らず、自然消滅してしまった経緯もある。

みのり棚田の学校実行委員会

- 活動エリアは野積地区である。
- 営農組合を母体に立ち上げた組織である。
- 主な活動内容は、田植、野菜等の植付、花木を用いた遊びの伝承（以上春季）、稲刈、野菜等の収穫、草花を用いた遊びの伝承（以上秋季）などである。また、清流フェスティバル、魚釣り、蛍観察会なども実施しており、年間を通じたおつきあいを意識している。
- 年 5 回のペースで、「棚田の学校便り」を発行している。
- 現在人手は目一杯の状況にあり、受入人数には自ずと限りがある。

富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊

- 活動エリアは布谷地区である。
- 子どもの遊び場が街中から消えてゆくことを問題と捉えており、「子ども力・遊び力」を高めることを目的として、皿回しなど遊びに一点集中した活動を心掛けている。
- 子どもにとって、農的な体験を重ねることが重要と考えており、森林組合と連携した草刈なども行っている。そこでは、機械ではなく敢えて大きな鎌を用いて、手作業で草を刈っている。

大広田環境づくり協議会

- 活動エリアは大広田地区（小学校区）である。
- 花の道づくり、海岸清掃、廃食油の回収とＢＤＦの製造、飛びだんご投げなど諸々の活動を、年間を通じて実施している。
- 縦のつながりだけではなく、従来あまり見られなかった横のつながりを築いていくことを意識している。

主な意見・論点

- 神通川上流では（恐らく）街中からの不法投棄が目立つ一方、下流の海水浴場では川を通じて流れて来る草が堆積して汚れているなど、地域内の環境問題が存在している。こうした実態について、まずは双方が双方の立場や状況をきちんと認知・認識することが大事である。その後、そうした問題を解決するための方法として、双方の交流という方向に話が進むのではないかな。
- 八尾地区も大広田地区も現時点で相当多くの取組を実施しており、そのため、なかなか労力や時間に余裕がないことを踏まえると、お互いの既存の活動をうまく“重ねる”ようなスタンスで交流を図る方がよいのではないかな。言葉は悪いが受け入れる方が手抜きできる感じで臨み、また、長期的な交流に根づかせるためにも、一度に全部をやろうとせず、メニューを小出しにしていくやり方でよいのではないかな。
- 八尾側で実施している取組について、受入人数には限りがある一方、大広田からの参加人数が常にある程度見込める状況になれば、その部分の“票読み”ができるようになるので、取組が安定することになり非常にありがたい。
- 大広田側から見ても、現時点の八尾のメニューは魅力的であり、単純に行きたいと思う。八尾より遠くの旧利賀村まで子どもを連れて薪割りに行ったこともあるが、同じメニューが近くの八尾にあるのであれば、是非行きたいと思う。

確定事項

下図のようなイメージに即して、既存の取組を活用しながら、交流を図ることとする。

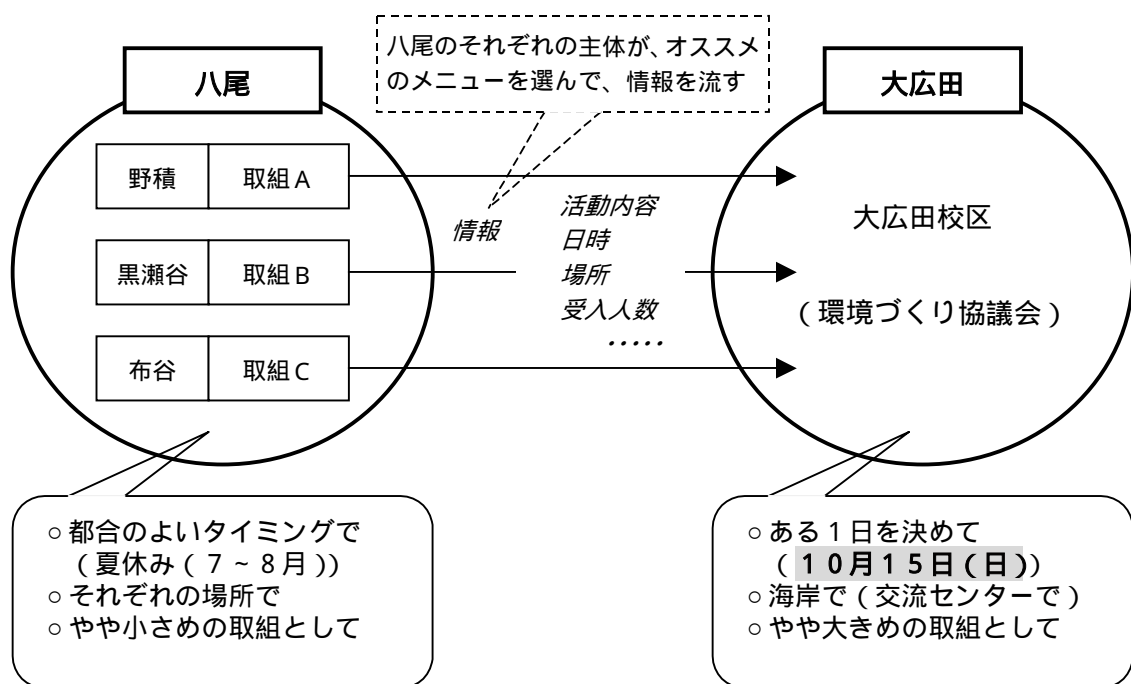
八尾地区での交流は小さめの取組を随時、大広田地区での交流は大きめの取組をある1日で、それぞれ実施するようにする。

八尾地区の各団体は、大広田地区の参加者を受入可能なメニューをいくつか選び、その情報を事務局経由（下記参照）で大広田側に伝える。

大広田地区での交流実施日は10月15日（日）の餅つき大会を第一候補とする。当日の運営方法について、ひとまず大広田内部で協議した後、事務局経由（下記参照）で八尾側に伝える。

事務局：エックス都市研究所 大久保

（TEL：03-5956-7503 / FAX：03-5956-7523 / E-mail：ookubo@exri.co.jp）



参考図 八尾&大広田 交流のイメージ

都市農山村共生対流調査ミーティング（第２回）議事録

日 時：平成 18 年 9 月 29 日（金）13：30～15：00

場 所：富山市エコタウン交流推進センター

出席者（敬称略）：

<大広田地区>

大広田環境づくり協議会

始良、寺田

<八尾地区>

富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊

早川、三島

<事務局>

北陸農政局農村計画部

草薙、立野

富山市環境部

谷崎、竹中、杉木

エックス都市研究所

大久保

主な議事

- 富山市環境部の杉木主任より開催の挨拶があり、参加者各自が自己紹介を行った後に、下記の事項についての意見交換がなされた。
 - 10 月 15 日に行う大広田地区での交流プログラムの詳細について
 - 8 月中に 2 度行った八尾地区での交流の結果について

主な意見・論点

エコタウン交流推進センター見学について

- エコタウン事業者見学については、当日が日曜日ということもあり、対応することは厳しい。ただし、現在建設中の B D F 製造プラントの現場を見るぐらいは可能である。
- エコタウン事業者の施設内に入れないということであれば、バスによるミニツアーを組んで、エコタウン周辺の道路をぐるりと回り、子どもにもわかりやすいように市担当者から事業概要を説明してはどうか（エコタウン交流推進センター内の見学だけでは、1 時間をつぶすことは厳しい点も考慮してはどうか）。

大村海岸での昼食時の過ごし方について

- 芝生で弁当を食べるだけでは、間が持たないのではないか。何も活動しないのでは少し寂しい気もする。
- 富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊の会員各位は、好奇心旺盛で労働を厭うどころか楽しみに変えてしまう気分があるので、20～30 分程度でもよいから、ゴミ拾いなど、何かボランティア的な活動を加えて欲しい（その方が本事業の趣旨に合うという面もある）。

- ただし、ゴミの中には医療廃棄物など危険なモノも含まれている。ゴミ拾いを行うのであれば、一緒に参加する大人が子どもに対して事前に注意を呼び掛ける必要がある。

大広田小学校での収穫祭時の過ごし方について

- 富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊の得意分野は、その名の通り“遊び”である。収穫祭には大広田地区の子どもの参加も見込まれることから、イタズラ村によるミニ遊び教室を開いて、早川代表の遊びへの指導を絡めつつ、両地区の子どもの遊びによる交流を図ってはどうか（皿回し、コマ回し等）。

その他

- JR越中八尾駅に集合するとかえって遠回りになってしまう参加者も多いため、集合は富山駅北口の方が都合がよい。そこから八尾の一団と大広田の数名が同行することにしようか。
- 場合によっては、遊び道具などの荷物を運ぶために、八尾からも自動車を一台出す必要があるかもしれない。
- 八尾側の特産品を餅つき大会にうまく絡めるなどして、食文化の交流を図るという方法も検討に値する（今回は難しいかもしれないが）。

確定事項（一部調整事項も含む）

当日は、エコタウン交流推進センターを見学するだけでなく、バスによるミニツアーを組み、市担当者の説明も加える。

当日は、大村海岸で弁当を食べるだけでなく、海岸への漂着物であるゴミを拾うこととする。その際、医療系廃棄物には手を触れないように呼び掛けるとともに、エコタウンのロゴ入りのゴミ袋を事前に用意しておく（←市が準備）。

当日は、収穫祭の場で餅つき大会に加えて、イタズラ村によるミニ遊び教室も開き、皿回し・コマ回しなどの遊びを通じて、両地区の親子どうし、子どもどうしの交流を図ることとする。なお、必要な遊び道具（皿回しセット・コマ回しセット等）はイタズラ村サイドが持参する。

当日の集合場所は富山駅北口とし、そこから10:00発の岩瀬浜駅行きのLRTに乗り乗る（集合時間は10分前の9:50としてはどうか）。

八尾側で自動車を出す場合は、富山駅北口周辺の駐車場を利用してはどうか？

当日の弁当の準備はE×が手配する（市はお奨めの弁当屋に関する情報を伝える）。

都市農山村共生対流調査ミーティング（第3回＜八尾地区現地視察＞）議事録

日 時：平成 18 年 12 月 14 日（木）～ 15 日（金）

場 所：八尾地区

出席者（敬称略）：

＜八尾地区＞

八尾総合行政センター	高土
黒瀬谷交流センター運営委員会	林
みのり棚田の学校実行委員会	山西
富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊	早川、三島

＜事務局＞

北陸農政局農村計画部	草薙
富山市農林水産部	塚本
富山市環境部	村崎、杉木
エックス都市研究所	大久保

現地視察

- 八尾地区の取組について、その拠点として機能している現地を訪ね、併せて、取組の概要を説明してもらった。

八尾総合行政センター

- 以下の事項について、配布資料をいただき、説明してもらった。
 - 八尾地域の地理的特性
 - 取組の契機・目的
 - ・ 地域住民の交流意識の芽生え
 - ・ 中山間地域の活性化対策
 - 取組の概要
 - ＜交流施設等の整備＞
 - ・ 町民農園ささランド
 - ・ 大長谷交流センター
 - ・ 黒瀬谷交流センター喜楽里館
 - ・ 八尾ゆめの森ゆうゆう館
 - ・ 中山間地域活性化施設
 - ・ 八尾ゆめの森体験農園
 - ・ 八尾ゆめの森こども元気村
 - ・ ほたるの館
 - ・ 白木峰山麓交流施設（温泉入浴施設）
 - ・ 白木峰山麓体験農園施設（滞在型コテージ・農園）

<ソフト施策>

- ・グリーンツーリズムモデル構想の策定
- ・地区別グリーンツーリズム推進組織（活性化協議会）の設立
- ・ラスティックエモーション yatsuo 実践塾・グリーンツーリズム部会設立
- ・各地区ごとでの体験活動支援
- ・体験インストラクターの募集、養成
- ・グリーンツーリズム体験教室・ツアー、イベント等の実施
- ・グリーンツーリズム情報の発信
- ・グリーンツーリズム普及啓発活動
- ・越中八尾スロータウン特区の申請・認定
- 利用実績
 - ・各種体験教室・イベント・直売市参加人数実績
- 取組の効果
 - ・地域ぐるみでの取組による地域連帯感の醸成、住民の生きがいがづくり
 - ・農産物の直売や体験指導を通じた女性や高齢者の所得拡大
 - ・そば打ち体験の推進、指導者育成に伴う農家レストランの開設
- 今後の課題
 - ・グリーンツーリズムの普及啓発・活動支援
 - ・グリーンツーリズム情報の積極的な発信
 - ・新富山市全体の連携によるグリーンツーリズムの推進
 - ・町内各種団体（農協、観光協会、商工会、森林組合）教育機関との連携強化
 - ・都市圏の自治体、NPO 等との連携
 - ・農家民宿、農家レストランの普及推進
 - ・定年帰農、田舎暮らし等の新規定住促進とグリーンツーリズムの推進

黒瀬谷交流センター運営委員会

- 以下の事項について、配布資料をいただき、説明してもらった。
 - 過去二年間の事業実績
 - 黒瀬谷交流センター喜楽里館年間利用者数
 - 農産物直売等による売上

みのり棚田の学校実行委員会

- 以下の事項について、説明してもらった。
 - 田植や稲刈等の農作業実習
 - おわら風の盆の前夜祭の見学
 - 学校や地域の子どもたちとのつながり

富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊

- 以下の事項について、説明してもらった。
 - イタズラ村の合宿
 - むかし遊び伝え隊
 - 子どもたちと遊びの関係性

都市農山村共生対流調査ミーティング（第４回）議事録

日 時：平成 19 年 3 月 20 日（火）

場 所：富山市役所（402 会議室）

出席者（敬称略）：

<大広田地区>

大広田環境づくり協議会

始良

<事務局>

北陸農政局農村計画部

草薙、立野

富山市農林水産部

杉本、木下、塚本

富山市環境部

辻、村崎、竹中、杉木

エックス都市研究所

大久保

主な議事

- 富山市環境部の杉木主任より開催の挨拶があり、下記の事項についての説明及び意見交換がなされた。
 - 報告書（案）について
 - 今後の方向性などについて

主な意見・論点

交流実施地区の意見

- 本事業を通じて、色々な事項を再発見できた面があり非常に有意義であった。特に、大広田環境づくり協議会が、地域外にはそれなりのネームバリューがある一方で、地元や八尾地区などの地域内において、その存在感や活動内容がまだあまり浸透していない面があることを、再認識することができた。
- 既存事業に上乘せしていくという方針のため、当初想定していたよりも、調整作業等の負荷が軽減できたように思う。
- また、大広田環境づくり協議会の広範なネットワークを活かし、多様な組織に参加を呼び掛けたことが効果的であった。特に、児童クラブとの連携は不可欠だったように思う。
- 本事業を足掛かりとして、八尾地区との交流は次年度以降も継続的に行いたいものと考えており、実際、八尾地区との話し合いも進んでいる。
- 交流のやり方としては、何よりもトップダウンではなくボトムアップで行うこと、行政主導ではなく地域組織や地元中小企業などの民主導で行うことが肝要であると思う。行政主導では、どうしても“やらされ感”が募り、取組が長続きしないように思う。

調整機関の意見

- 本事業のような交流を実施する場合、そのコンセプト自体に異を唱える人間は少ないように感じる。
- むしろ、総論賛成・各論反対ではないが、個別具体の細部の条件を詰めることが、非常に重要であると認識を改めた。本文中にも表記したが、まさに、「神は細部に宿る」というような面があるように思う。

その他の意見

- 交流に係る情報がどこから入ってくるかということが重要であると思う。交流相手から直接入ってくるのか、それとも、民間の調整機関から入ってくるのか、あるいは、行政から入ってくるのか等により、参加の意向も変わってくるのではないか。
- コンセプトをしっかり決めること、交流の背後にストーリーを仮託すること（本事業で言うところの“大広田の水辺・棚田・森”のような具体性のあるイメージ）などが、取組の成否を決める大きな要素なのではないか。
- 地域の中小企業であれば、交流のネットワークに加わることにより、自然発生的に仕事につながる面もある。何が何でも原資や対価がないと動けないということではないので、その点は留意すべきではないか（例えば、行政がマスコミを連れて来てくれれば、参加するだけでかなりのPRになるため、企業側は対価を求めないはず……）。

地区別調査票

都市と農山漁村の共生・対流を進めるための社会実験に関する地区別調査

< 回答様式 >

○ 社会実験のテーマ

体験学習とボランティア活動を組み合わせた『出会い・交流の場』利用による地域内交流モデルの確立

○ 参加自治体等（参加自治体、企業、団体等）

富山市
大広田環境づくり協議会
黒瀬谷交流センター運営委員会
みのり棚田の学校実行委員会
富山社会人大楽塾
専門調査機関（エックス都市研究所）
八尾地区には複数の多様な受入組織が存在しているため、農山漁村側の受皿については、組織の特性や協力度合等を勘案して、フレキシブルに対応していく。

以降の調査項目については、可能な限り簡潔かつ明快に記入して下さい。

○ 社会実験で取り組むことの全体像を100字以内で要約して下さい。

広域合併により、県中央部を流れる川の川下の都市側と川上の農山村側が共存することとなり、この水系の繋がりを活かして創出された出会い・交流の場で両者が連携して交流を行う新たな長期的システム構築を目指す。

○ 定義との対応

ここで社会実験とは、「都市と農山漁村部の双方が共生・対流を阻害する要因の解消に協力して取り組むモデル的な取組」と定義します。

Q1 実験に参加する農山漁村部とは誰（又はどこ）ですか？貴自治体との関係は？

市内の、八尾町地域の中山間地区にある黒瀬谷交流センター運営委員会や、みのり棚田の学校実行委員会などを想定している。旧八尾町の頃からの「越中八尾スロータウン特区」などの取組を通じて、行政と連携している市民団体である。

Q2 実験に参加する都市部とは誰（又はどこ）ですか？貴自治体との関係は？

市内の、海岸部に近い大広田地区にある大広田環境づくり協議会を想定している。PTAや自治会を母体とする市民団体であり、環境教育などの分野で行政と協力している。

Q3 解消に取り組む共生・対流を阻害する要因とは、どのようなものですか？

山側の八尾地区と海側の大広田地区では、個別に体験学習やボランティア活動などを展開しているが、お互いの活動に対する興味や関心が希薄であり、関連する情報も十分には伝わっていない。山側では、過疎化のための労働力不足から森林や農地の手入れや河川の流域管理が十分にできないことに困っているが、海側では、海へ木材やごみが流れ込むことを防げない理由を理解できないなど、山側と海側の連携に悪循環が起きている。

Q4 都市部と農山漁村部の協力とは、一言でいうとどのような協力ですか？

Q3のような地域環境上の問題について、都市部と農村部が認識を共有化した上で、農山漁村部の土地を都市部の住民と農山漁村部の住民が協働管理を行うこと。具体的には、都市側と農山漁村側が相互利用できる『出会い・交流の場』を農山漁村部に設けて、例えば、そこで大広田地区の住民が八尾地区の農地・森林や河川の環境保全作業に参加できるような機会を形成していくこと。

Q5 どのような点でモデル的な要素（他地域への波及・展開の可能性）がありますか？

富山市では、市町村合併で行政エリアが拡大したため同一市域内に都市部と農山漁村部が共存することとなり、これまでお互いに見過ごしていた地域環境的な問題が顕在化するケースが今後増えることが予想される。既存の地域組織を活用して、土地の協働管理を通してニーズ・シーズのマッチングを行うことにより、具体的な作業課題や交流メニューを洗い出した後、行動を起こすことができれば、地域の問題をスムーズに解決できる可能性がある。このように、あくまでも同一市域内の組織が中心となり交流を進め、新たな関係を構築・維持していくことにより、自らの手で地域の問題を解決していく点がモデル的である（広域合併により共存することとなった都市部と農山漁村部の交流を、水系（神通川）という繋がりを活かし、地区間で長期的に確保するためのモデルを目指す）。

○条件1：先進性

ここで先進性とは、「都市部と農山漁村部の双方で取り組む、これまでにない取組であること」と考えています。

Q6 どのような点から、これまでにない先進的な取組だと言えますか？

（他では既にあるが、当町では初めての試み、というのはダメです。全国的にみて先進的であるといえる必要があります。）

同一市域内の特定の地区どうしが『出会い・交流の場』というコモンズ（共有地、協働で管理する土地）を設定して、その場を共生・対流の舞台と位置づけ、双方向の関係、長期安定的な関係を築いていく点が先進的である。

○条件2：構想でなく実践

ここでは、「実際に人・情報等の移動を試みながら社会システムを構築すること」と考えています。

Q7 実際に試みる人・情報等の移動とは、どのようなものですか？

大広田地区と八尾地区が同じテーブルについて議論して、ワークショップ的に都市側と農山漁村側のニーズ・シーズの調整を行い、交流メニューの洗い出しと交流プログラムの作り込みを行うことにより、情報の移動としてそれぞれの地域の歴史、文化、自然についての情報の共有が発生し、更に人の移動として「出会い・交流の場」での両地域の人の作業と交流が行われる。

Q8 構築する（又は構築を目指す）社会システムとは、どのようなものですか？

大広田地区の住民が八尾地区の『出会い・交流の場』に長期的・継続的に通い、清掃や間伐等の作業や伝統行事の保存開催に協力し、新しい親戚関係を構築する仕組みとその逆（八尾地区から大広田地区へ通う）の仕組みを持つシステムである。この仕組みを円滑に進めるために、地域通貨の活用も視野に入れる。

○条件3：定着性の高い社会システムを指向

ここでは、「双方にとって win-win となる社会的定着性のある仕組みのモデル化を目指すこと」と考えています。

Q9 実験に参加する農山漁村側のメリットはどのようなことですか？

森林保全など農山漁村内の自然環境に定期的に手が入り、祭礼などの文化活動でも連携できる要素があるために、コミュニティ及び社会的共通資本の健全な維持という効果が期待できる。

Q10 実験に参加する都市部側のメリットはどのようなことですか？

（農山漁村を訪れる人が農林漁業体験を通じて「ゆとり」や「やすらぎ」を享受する、という通常のグリーン・ツーリズム全般に該当する一般論ではダメです。）

お互いが一定の時間を共有することにより、都市側で生活している市民の自然志向や環境意識が高まるという効果が期待でき、地域の環境問題に対して都市側のみならず農山漁村側の実態も踏まえて、連携して対処すべきという認識が生まれる。

Q11 どのような点で、社会定着性が高い（例：ランニングコストが非常に小さい、ゼロエミッションに近い、低コスト・ハイリターン 等）といえますか？

協働管理を行う土地の所有権は移転せずに、利用権のみを見直す仕組みであるため、土地代取得など所有権の移転に係るコストが発生しない。また、新たに組織を立ち上げたり施設を建設したりするのではなく、あくまでも既存の地域組織のポテンシャルを活用して取組を進めるため、低コストで済む。さらに、事前にお互いのニーズ・シーズの調整を行い同一市域内で取組を推進することから、人・情報等の移動に必要なコストも抑制できる。

○共生・対流のターゲット

Q 1 2 主にターゲットとする人々の年代層は、どのようなものですか？

(子供・小中学生、 高校生以上の未成年、 若年層(20～30歳代)、 中高年層、特に団塊世代、 親子など複数の世代をターゲット、 幅広い年代をターゲット、 特にターゲットとする年代層はない、のいずれかを選んで下さい。いずれにも当てはまらない場合は、具体的に記入して下さい。)

(大広田環境づくり協議会の母体はPTA・自治会であるため、子供・小中学生、若しくは、その親や祖父母について、動員力が見込める。)

Q 1 3 主なターゲットの性別は？

(男性、 女性、 両方をターゲット、 特にターゲットとする性別はない、のいずれかを選んで下さい。)

--

Q 1 4 上記以外に主なターゲットとして該当するものは？

(学生、 ニート・フリーター、 サラリーマン、 主婦、 家族、のいずれかを選んで下さい。いずれにも当てはまらない場合は、具体的に記入して下さい。)

Q 1 2 の特性を踏まえると、 が主体となるものと考えている。

○既存の取組との仕分け

Q 1 5 これまでの既存の取組と今回始める社会実験の取組との仕分け・役割分担は？

農山漁村側(受入側)の負担に配慮して、原則的に現在実施中の取組を最大限活用する姿勢に基づき、具体的な検討を進める(できることから、できる範囲で、実施していく)。従って、既存の取組の中で活用できる部分(八尾地区の特区など)については、社会実験の取組の基盤として、最大限活用していく。

Q 1 6 実施に当たり、既存の調査結果や取組結果を活用する予定はないですか？

既存の取組で失敗した事例の検証を踏まえて事業の拡大につなげたい。

過去の取り組みにおける課題

夏休み期間中に、家族連れで2泊3日の農家民宿体験希望者を、遠隔地の都会（関東・関西）を対象に募ったが応募がなく、急遽、都会からの転勤家族に呼びかけたが、帰省するというものが多く、実現できなかった。

バスツアーを企画したが、広報のやり方で極端に応募者が増減した。

毎年、同じ企画のグリーンツーリズムを呼びかけると、リピーターは極端に少なくなる。

などの失敗例があるが、その他の事例も集めて検証し、対象者を絞り込み、都市側と農山漁村側のニーズ・シーズの調整を行い、交流メニューの洗い出しと交流プログラムの作り込みを行うなど、双方に対して心配りができる仲人の仕事のプロセスを確立して事業の拡大につなげたい。

○実施体制

Q 1 7 参加予定機関・企業・団体等との調整は、どこまで進んでいますか？

大広田地区及び八尾地区ともに、事前説明を1回開催した。今後、3月下旬～4月上旬ぐらいにかけて、両地区の顔合わせを行い、交流メニューの抽出及び確定へと進めていく予定である。

Q 1 8 実施に当たり国が関与する必要性・必然性はどのようなことですか？

Q 5 で述べたような市町村合併に伴う単一行政エリアの拡大、その結果生じる地域環境問題の顕在化、特に過疎地域における人口減少に伴う社会基盤の劣化などに対応するためには、都市と農山漁村の共生・対流を一つのツールとして、地域力を高めることを可能とするビジネスモデルをストックする必要がある。このような問題は全国的な問題であり、かつ、スタート段階では、システムの検討や構築をキックオフできる資金が必要である。

Q 1 9 社会実験の中で、国の予算又は負担で実施予定の取組部分と、自治体等参加機関の予算又は負担で実施予定の取組部分とは、どのように整理・仕分けされますか？

富山市では、本社会実験と連携した取組として地域通貨の発行を計画している（平成18年度事業である「エコ・ボランティアサポート事業」）。その際、市の一般財源を原資にポイントを発行するが、ポイントの獲得メニューや利用メニューとして、本社会実験の交流メニューを加えることを検討する。その他の部分については、原則的に国の予算をあてがう予定である。

Q 2 0 予算面での国の支援が困難となった場合、社会実験の実施はどうなりますか？

費用を伴わない交流メニューを考え、実施の可能性について検討したい。

Q 2 1 実施に当たり、国のどのような機関と、どのような連携を希望しますか
(例：〇〇省(〇〇協議会への参加) 〇〇省〇〇局(〇〇事業による調査結果の本
実験へのインプット)等)

農林水産省：これまでの取組みをふまえた効果的な事業実施への指導及び農山漁村のリソ
ースの活用の観点における助言を、全体会議等への参加などを通してお願い
したい。

Q 2 2 現時点で想定している国の予算又は負担額、自治体等参加機関の予算又は負担額
は、概ねどの程度ですか？(例：国〇〇〇〇万円、〇〇市〇〇〇万円、〇〇町〇
〇万円程度)

国の予算として1,500万円程度を見込んでいる。富山市500万円(地域通貨：環
境省の「環境と経済の好循環のまちモデル事業」平成18年度分)
「環境と経済の好循環のまちモデル事業」は平成17年度～平成19年度において実施

アンケート調査票

（第1回農水省検討委員会提出資料）

自治体名	富山県富山市	
社会実験テーマ	体験学習とボランティア活動を組み合わせた『出会い・交流の場』利用による地域内交流モデルの確立	
代表自治体 以外の参画 主体	農山漁村側	黒瀬谷交流センター運営委員会（富山市＜旧八尾町＞） みのり棚田の学校実行委員会（富山市＜旧八尾町＞） 富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊（富山市＜旧八尾町＞）
	都市側	大広田環境づくり協議会（富山市＜旧富山市＞）

1. 農山漁村地域の概況

(1) 代表自治体の概況

人口推移*		1985	1990	1995	2000	2005
	総人口（人）	401,070	408,942	417,595	420,804	421,961
	男性（人）					204,610
	女性（人）					217,351
年齢別人口*	年少人口(0-14)	84,590	71,407	63,693	59,554	
	生産年齢人口(15-64)	269,050	279,458	285,249	280,871	
	高齢人口(65-)	47,409	56,584	68,553	80,103	
	高齢化率（％）	11.8	13.8	16.4	19.0	
世帯*	世帯数（世帯）	115,619	124,210	135,936	145,821	151,729
人口増減	人口増減 （減少は－記入）					
	Ｕターン者数**	2000年～05年の累積人数：				人
	Ｉターン者数**	2000年～05年の累積人数：				人
面積	総土地面積：1,241.84km ² （耕地面積：124.48km ² 、林野面積：859.83km ² ）					
気象状況	平年値気温：13.7 平年値降水量：2245.1mm 平年値降雪深さ：69cm 平年値日照時間：1599.6時間					
就業人口 推移*		1985	1990	1995	2000	2005
	第一次産業就業者数					6,248
	第二次産業就業者数					72,981
	第三次産業就業者数					139,852
平均地価	住宅地平均価格 円 / m ²					
財政力指数	0 . 7 3 1					
交通 アクセス	（東京・名古屋・大阪）から（電車・飛行機・車）で（1.5）時間					
農業地域 類型区分	都市的地域 ・ 平地農業地域 ・ 中間農業地域 ・ 山間農業地域					
地域振興制度 の指定状況	山村振興法（一部地域） 過疎法等（一部地域）					

注）市町村合併を行っている場合は現市町村のデータをご記入ください。過去のデータについては、旧市町村の合計値をご記入ください。

備考*）国勢調査の数値をご記入ください。

備考**）貴自治体で具体的数値を把握されている場合はご記入ください。

(2) 受入地域の地域概況

地区名称	富山市の場合は、市内での交流に限定した取組である（市内の参画主体が市内で往来する）ため、受入地域という概念は、あてはまらない。					
人口推移*		1985	1990	1995	2000	2005
	総人口（人）	(1)代表自治体の概況を参照。				
	男性（人）					
	女性（人）					
高齢化率	高齢化率（％）	(1)代表自治体の概況を参照。				
世帯*	世帯数（世帯）	(1)代表自治体の概況を参照。				
人口増減	人口増減 （減少は - 記入）	(1)代表自治体の概況を参照。				
	Ｕターン者数**					
	Ｉターン者数**					
面積	(1)代表自治体の概況を参照。					
役場からのアクセス	大広田地区（旧富山市域内）と八尾地区（旧八尾町域内）のアクセスは、 （電車・ 車 ）で 約（60）分					

(3) 受入先の地域資源の状況

「富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊」では、「親子遊び教室」や「森の草刈り少年隊」などの受入企画を実施する際の拠点として、当時空き家だった家屋を改修した民家を活用する計画としている。 なお、本事業は、全般的に空き家を活用するとの趣旨で取組を進めている訳ではなく、参画主体の拠点が空き家を活用したものであったというにすぎず、賦存量を把握する意義に乏しいことから、そうする予定もない。	
---	--

2. 新しい共生・対流システムの概要

(1) 「社会実験」および「新しい共生・対流システム」の概要

社会実験の全体像	最終的に構築を目指す社会システムの概要
広域合併により、県中央部を流れる川の川下の都市側と川上の農山村側が共存することとなり、この水系の繋がりを活かして創出された出会い・交流の場で両者が連携して交流を行う新たな長期的システム構築を目指す。	大広田地区の住民が八尾地区の『出会い・交流の場』に長期的・継続的に通い、清掃や間伐等の作業や伝統行事の保存開催に協力し、新しい親戚関係を構築する仕組みとその逆（八尾地区から大広田地区へ通う）の仕組みを持つシステムである。この仕組みを円滑に進めるために、地域通貨の活用も視野に入れる（「地域通貨の活用」の部分では、 <u>交流時の実際の利用に向けた課題整理まで含めて検討する</u> ）。
（変更の理由（上記右欄下線部）） 現時点では、まだ、地域通貨の事務手続き面（地域通貨の発行、記録、管理等）の体制整備が不十分であり、実際にポイントを配布したり利用したりすることが困難な状況にあるため。	

(2) 解消を図りたい阻害要因と具体的な解消方法

阻害要因	解決方法
山側の八尾地区と海側の大広田地区では、個別に体験学習やボランティア活動などを展開しているが、お互いの活動に対する興味や関心が希薄であり、関連する情報も十分には伝わっていない。山側では、過疎化のための労働力不足から森林や農地の手入れや河川の流域管理が十分にできないことに困っているが、海側では、海へ木材やごみが流れ込むことを防げない理由を理解できないなど、山側と海側の連携に悪循環が起きている。	山側では街中からの不法投棄が目立つ一方、海側では川を通じて流れて来る草が堆積して汚れているなど、地域内の環境問題が存在している。 こうした実態について、まずは、双方が双方の立場や状況をきちんと認知・認識することが大事であり、本事業はその一里塚である。 簡単な解決方法といったものは恐らくなく、本事業を契機に今後、小規模でもよいから同様の取組を長期継続的に安定した交流へと育成していくことが、地道ではあるが最良の解決策であると認識している（まずは本事業により、必要な経験やノウハウを蓄積することが肝要であると認識している）。

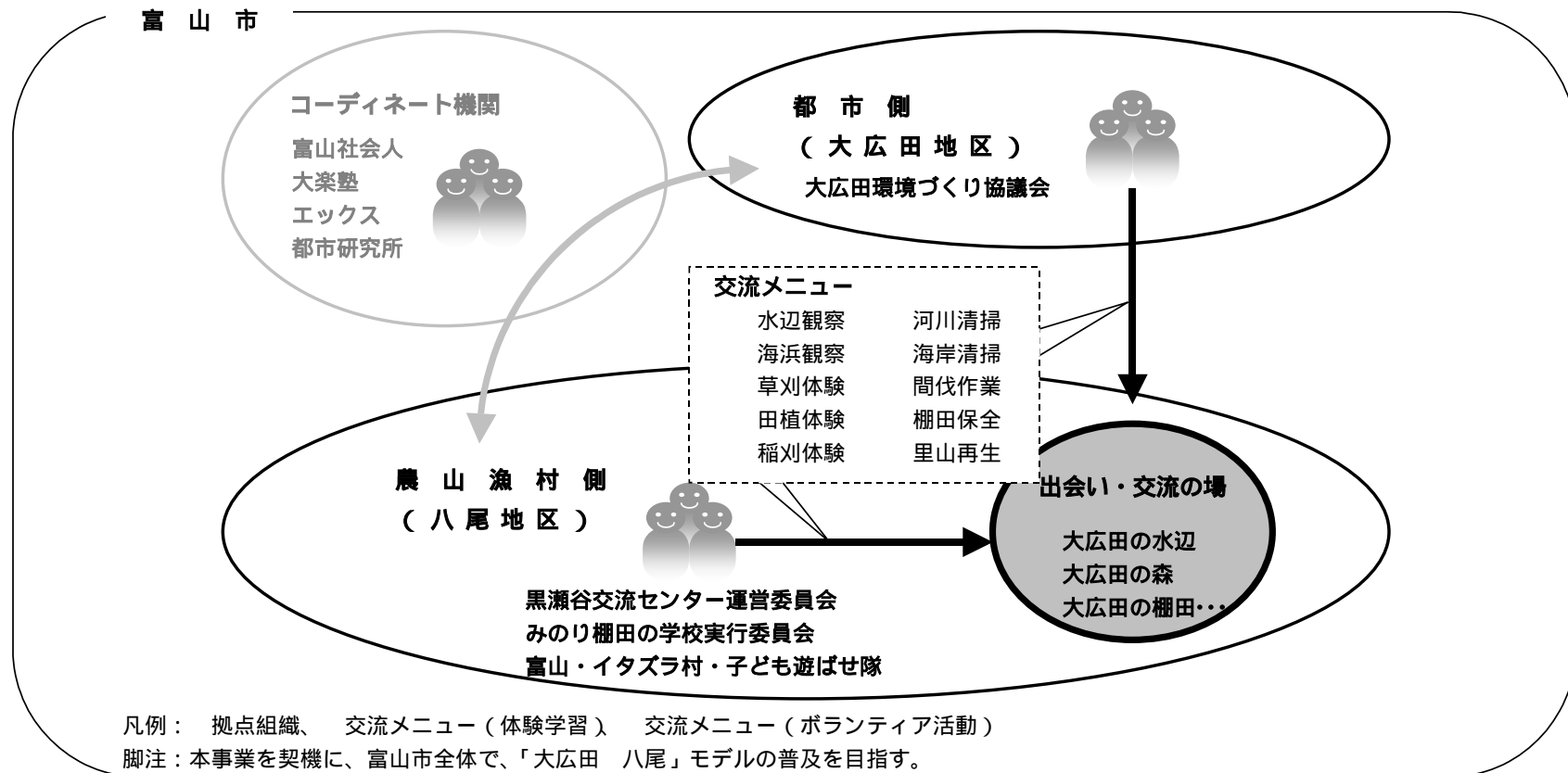
(3) 都市側組織との連携の経緯

都市側の組織としては、市内の海岸部に近い大広田地区にある大広田環境づくり協議会を想定している。PTAや自治会を母体とする市民団体であり、環境教育などの分野で行政と協力している。 また、農山村側の組織としては、市内の八尾町地域の中山間地区にある黒瀬谷交流センター運営委員会、みのり棚田の学校実行委員会、富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊を想定している。旧八尾町の頃からの「越中八尾スロータウン特区」などの取組を通じて、行政と連携している市民団体である。 上記の組織どうしは、特にこれまで面識があった訳ではないが、連携して取組を進める余地があり、そのことにより生まれるメリットも大きいと考えたため、今回新たに連携することとしている。
--

< 実験システムの概要図 >

目 標：市内で、都市側と農村側の特定の地区どうしが、自然豊かな一定の地域を『出会い・交流の場』として相互利用することにより、「都市」と「農村」の長期安定的な交流を促進する。

方 針：都市側は「大広田地区」を、農村側は「八尾地区」を、それぞれモデル地区として設定する。
対象領域は、「体験学習」と「ボランティア活動」に限定する。
相互利用メニューの褒賞として、地域通貨の利用を（交流時の実際の利用に向けた課題整理まで含めて）検討する。



3. 本年度の社会実験の進捗状況

(1) 農山漁村側組織と都市側組織との調整方法

調整方法	1. 会議形式 2. 打合せ形式 3. メール・電話等での連絡形式 4. その他
会議名称	大広田＆八尾ミーティング
実施頻度	H18.4～H19.3までに4回で計画。 (2.及び3.は必要に応じて随時実施。)
出席者(敬称略)	大広田環境づくり協議会 黒瀬谷交流センター運営委員会 みのり棚田の学校実行委員会 富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊 富山市農林水産部 富山市環境部 八尾総合行政センター 富山社会人大楽塾 エックス都市研究所
討議内容(実績)	・交流メニューの洗い出しについて ・交流プログラムの作り込みについて

(2) 人の移動を伴う具体的なプログラム

プログラム名称	エコタウン交流推進センター等の見学
実施時期	H18.10.15
交流の参加者概要および参加人数(募集人数)	農山漁村側：大広田環境づくり協議会のメンバー 30人程度 (八尾地区内の小学生を含む) 都市側：大広田環境づくり協議会のメンバー 10人程度 (大広田地区内の小学生を含む)
交流内容 (作業・活動の内容)	・富山市エコタウンの見学 (エコタウン交流推進センター、エコタウン事業者等) ・大村海岸の視察(古志の松原、ごみ等の漂着物の状況等) ・第1回大広田収穫祭への参加(収穫祭、餅つき大会等)

備考*) 実際に人の移動を伴う取組

4. 成果の把握

(1) 本年度の社会実験による成果の把握

評価指標	評価指標の把握方法
2.(2)で記載した通り、富山市の場合では、「本事業を契機に今後、小規模でもよいから同様の取組を長期継続的に安定した交流へと育成していくこと」が重要であると認識しており、「本事業はその一里塚であり、本事業により、必要な経験やノウハウを蓄積すること」が何よりも肝要であると考えている。 従って、本社会実験の成果を定量的な要素を積み上げることにより、指標化することは特段考えていない。それよりもむしろ、参加者からの意見や感想、こうするともっとよいのではないかという次なるステップへの課題出しの方に重きを置くこととする。	左欄のように考えていることを踏まえて、主に、具体的な取組に参画した主体（受入側・参加側双方）のメンバーに対してヒアリング調査を行い、今後の体制のあり方や創意工夫すべき点など、問題点や課題を具体的に整理していくこととする。

(2) 新しい共生・対流システムの成果の把握

	目標	具体的な指標
農山漁村側	本事業が契機となり今後、長期的・継続的・安定的に同様の取組が展開され、地域内の自然環境やコミュニティ活動が十分に保全・維持されていく体制や状況を都市側と連携して、整備構築していくこと。	○ 取組の長期継続性及び安定性 ・ 大広田 八尾で次年度以降どの程度、今年度同様の取組がなされるか？ ・ 大広田 八尾と同様の地域連携体制が次年度以降どの程度、構築されていくか？ ○ 参加者の満足度 ・ 表面的な数値指標（取組件数、参加者人数 等）よりもむしろ、具体的取組を仕掛けた受入側のキーパーソンや参加者個人がどれだけ満足したかという意識レベルの話の方が、こうした取組の長期性・継続性・安定性を強化するためには重要（小規模でもキラリと光る取組はあるはずとの認識）
都市側	本事業が契機となり今後、長期的・継続的・安定的に同様の取組が展開され、地域内の自然環境やコミュニティ活動が十分に保全・維持されていく体制や状況を農山漁村側と連携して、整備構築していくこと。	

以上

アンケート調査票

（第2回農水省検討委員会提出資料）

代表自治体名	富山県富山市
社会実験テーマ	～体験学習とボランティア活動を組み合わせた『出会い・交流の場』利用による地域内交流モデルの確立～

1. 本年度の社会実験調査の進捗状況について

本年度実施している社会実験調査の進捗状況を具体的にご記入ください。また、当初の予定と異なっている点等がございましたら、変更内容について、ご記入ください。

<これまで実施した交流イベント> ○ イタズラ村 親子遊び教室（8月2日開催） ○ イタズラ村 森の草刈り少年隊（8月19日～20日開催） ○ 大広田環境づくり協議会 エコタウンの見学等（10月15日開催） <これから実施する予定の交流イベント> ○ 黒瀬谷交流センター運営委員会 キラリそば美食会（1月28日開催予定） <調査のとりまとめ関係> ○ 上記の交流イベント以外にも、随時、関係地区（大広田地区 & 八尾地区）や所管組織（北陸農政局）などを含めた、打合せやミーティングを行っており、現在、調査のとりまとめを進めている段階である。
--

73

2. 実施体制および各組織の役割について

貴地区で導入を進めている「新たな共生・対流システム」に参画している農村側および都市側の各組織の役割について、前回お伺いした内容をもとに記載しております。空欄は適宜ご記入を、変更箇所は適宜修正をお願い致します。変更された場合は、その理由を右欄に具体的にご記入ください（例：○○の点で意見調整がつかなかった）。

分類	代表自治体以外の参画組織	役割	変更理由
農村側	富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊	・親子遊びや森林整備等の企画・運営 ・大広田地区（エコタウン産業団地や大村海岸）でのイベントへの参加	特に変更箇所はない
	黒瀬谷交流センター運営委員会	・手持ちの交流メニュー（農産物・特産品の直売会やキラリそば美食会等）への参加呼び掛け	特に変更箇所はない
	みのり棚田の学校実行委員会	・手持ちの交流メニュー（蛍の観察会等）への参加呼び掛け	特に変更箇所はない
都市側	大広田環境づくり協議会	・エコタウン見学や海岸でのゴミ拾い等の企画・運営 ・八尾地区（布谷）でのイベントへの参加	特に変更箇所はない

3. 現時点で直面している課題について

貴地区で「新たな共生・対流システム」の導入を進めてみて、現時点で課題と感じていることはありますか。あてはまるものすべてに○印をつけてください。
また、○印をつけた課題の内容を、下表の該当欄に具体的にご記入ください。

1. 農村側と都市側組織との調整面で課題が生じている	2. 農村側の受け入れ体制面で課題が生じている
3. 都市側組織の参加（受け入れ）体制面で課題が生じている	4. 阻害要因の解決策がうまくいっていない
5. 当初期待していた成果があがっていない	6. 既存の制度が取組の障壁となっている
7. その他	

上記設問番号	課題の具体的な内容
1.組織間調整	・組織間調整の主要部分を地域外の主体が担っているが、本調査事業で実施したような交流を長期的に続けていくためには、地域が必要な調整機能を内部化することが課題であると考えられる。
2.農村側	・自らの地区として既に手持ちの交流メニューを活かしながら都市側との交流を進めていくことは可能だが、そのためだけに、一から体制を整備し、メニューやプログラムを練り上げ、新たな取組として地域に根づかせる場合には、多大な負担と労力が必要になる。従って、既存の状況（ポテンシャル）と都市側との交流との理想像の間で、バランスを適切に取ることと、現実的なアクションの優先順位を適切に見極めていくことが課題であると考えられる。
3.都市側	・自らの地区として既に手持ちの交流メニューを活かしながら農村側との交流を進めていくことは可能だが、そのためだけに、一から体制を整備し、メニューやプログラムを練り上げ、新たな取組として地域に根づかせる場合には、多大な負担と労力が必要になる。従って、既存の状況（ポテンシャル）と農村側との交流との理想像の間で、バランスを適切に取ることと、現実的なアクションの優先順位を適切に見極めていくことが課題であると考えられる。
4.阻害要因の解消	該当せず
5.成果面	該当せず
6.制度面	該当せず
7.その他	・「神は細部に宿る」というような面があり、全体のコンセプトには賛成だが、細部に関して、きめこまやかな対応や調整が必須となることが判明した。具体的には、 - 移動手段をどうするか（自家用車を出すのか、公共バスなど行政の支援を仰ぐのか 等） - 昼食をどうするか（誰が弁当を手配するのか、誰が費用を負担するのか、自ら弁当を持参するのか 等） - 川遊びなど危険を伴うアクティビティがあるので、保険へ加入することが望ましいのだが、それを誰が言い出し、誰が手続きを行い、誰が費用を負担するのか…… - 相手方に恥はかせられないので、それなりに参加人数を揃えたいが、誰がその調整をつけるのか、また、実際に誰が参加するのか…… というような事項を一つ一つつぶしていかないと、関係者の間にしこりが残り、取組が長続きしないことが危惧される面がある。そのような状況を正しく認識した上で、適宜、フレキシブルな対応や調整を図ることが課題であると考えられる。

4. 阻害要因の解消方策について

貴地区で「新たな共生・対流システム」の導入により、解消を図りたい共生・対流の阻害要因およびその解消方策に変更点はありますか。下表は前回ご記入いただいた内容をもとに記載しております。空欄は適宜ご記入を、変更箇所は適宜修正をお願い致します。

また、解消方策に取り組んでみた結果および結果の要因を具体的にご記入ください（現段階でご記入いただける範囲で結構です）。

分類	阻害要因	解消方策	方策の結果	結果の要因
情報面	・農村側と都市側の相互の活動に対する興味や関心が希薄、情報が不足。 ・農村側の状況（過疎化により森林整備等の地域管理が困難）への都市側の理解が不足。 ・都市側の状況（川や海岸に流木等のゴミが散乱）への農村側の理解が不足。	・農村側と都市側の双方が互いの立場や状況をきちんと認知・認識できる機会を設ける。 ・具体的には、本調査事業により、双方が交流できるイベントを企画・実施する。	・これまで3回の交流イベントを実現でき、ある程度は互いの立場や状況に係る認知・認識が深まった。	・都市側が農村側の川で実際に水遊びや草刈りをしたり、農村側が都市側の海岸でゴミ拾いをしたりと、交流メニューの中に“体感的な”プログラムを導入したことが、認知・認識が深まったことの主な要因として挙げられる。
時間面	・大人はなかなか平日に時間が取れない。 ・子どもも参加した方が有意義であり、その方が取組内容も深まるが、平日では難しい。	・大人も子どもも、ある程度フレキシブルに参加できる夏休みや日曜日を活用する。	・これまで3回の交流イベントはすべて夏休み若しくは日曜日を活用したものであり、平日の実施を避けることができた。	・本調査事業の実施に向けて、今年度の早い段階から計画・準備を進めていたことが、望ましい開催日の選定につながった大きな要因として挙げられる。
経済面	・農村側と都市側の交流を進める際に必要となる原資が不足。	・本調査事業の予算を活用する。	・費用の心配をすることなく、遅滞なく交流イベントを実施することができた。	・本調査事業の予算の使い道について、事前にある程度は関係者間で調整をつけておいたため、不安感を抱くことなく、取組に臨めたことが交流イベントを開催できたことの大きな要因として挙げられる。

5. 貴地区における社会実験調査の取りまとめの方向性

(1) 社会実験調査の成果について

貴地区で、本年度の社会実験調査の成果として整理する予定の内容（調査項目と調査方法）を具体的にご記入ください（定量的な把握事項はお伺いした内容をもとに記載しておりますが、適宜加筆修正をお願いします）。把握する予定がない場合は「把握予定なし」とご記入ください。

分類	成果として把握する項目	把握方法
定量的な把握事項	把握予定なし	-
定性的な把握事項	・農村側の都市側に対する意識の変化 ・都市側の農村側に対する意識の変化 ・双方が双方の取組に参加することより生じた自らの地区の活性化に係る効果 など	両地区の主な関係者へのヒアリング。

(2) 貴地区調査報告書の構成案について

現在、貴地区で想定されている本年度の社会実験調査報告書の構成案（記載事項概要イメージ）を具体的にご記入ください。現時点での仮案で結構ですので、ご記入いただける範囲でお願い致します。

- 第1章 はじめに

第2章 実施地区の概要（農村側 & 都市側 双方の背景を整理）

第3章 社会実験の概要（全体のコンセプトを提示した上で、5W1Hを明示する形で内容を整理）

第4章 交流イベントの内容（実施した個別の交流イベントごとに、5W1Hを明示する形で内容を整理）

第5章 取組の成果および問題点・課題の整理（主要関係者へのヒアリングなどを踏まえて、取組の成果を評価し、問題点・課題を抽出）

第6章 今後の取組に向けて（普及推進策などを含めて、次年度以降の方向性を整理）

6. 貴地区における今後の方向性

(1) 貴地区の次年度以降の取組予定について

貴地区では、「新たな共生・対流システム」の取組を次年度以降も継続して行う予定ですか。あてはまるもの1つに○印をつけてください。また、次年度以降、取組内容や体制を変更される場合は、その内容や理由について、下表に具体的にご記入ください。

1. 次年度以降も本年度と同じ取組を行う予定である	2. 次年度以降は取組の内容を拡充して行う予定である → 下表記入
3. 次年度以降は取組の内容を縮小して行う予定である → 下表記入	4. 次年度以降は体制を拡充して行う予定である → 下表記入
5. 次年度以降は体制を縮小して行う予定である → 下表記入	6. 次年度以降は取組を行わない予定である → 下表記入
7. 分からない	8. その他(当該地区への委任が基本線、他地域への展開も含めて行政は側面支援)

次年度以降の具体的な取組内容・体制(変更点)	該当せず(上表8. その他の括弧内を参照)
変更の理由	該当せず(上表8. その他の括弧内を参照)

(2) 次年度以降の取り組む上での課題について

貴地区において、次年度以降「新たな共生・対流システム」の取組を実施する上で課題と考えられることはありますか。あてはまるものすべてに○印をつけ、○印をつけた課題の内容を、下表の該当列に具体的にご記入ください。

また、課題の解決の方向性として、どのようにお考えですか。可能な範囲で結構ですので、具体的にご記入ください。

1. 事業の実施に向けた資金の確保	
2. 都市側組織 / 農村側組織の参加(次年度以降も継続的に取り組むかどうか不明)	
3. 事務局の作業負担の軽減	
4. 農村側の受け入れ体制の整備(農村側の受け入れ負担の軽減)	
5. その他	

上記設問番号	課題の具体的な内容	解決の方向性
1. 資金確保	該当せず	該当せず
2. 組織の参加	該当せず	該当せず
3. 事務局作業	該当せず	該当せず
4. 農村受け入れ体制	該当せず	該当せず
5. その他	(1)の表で示した通り、次年度以降の取組は、本年度の経験やノウハウを踏まえて当該地区へ委任することが基本線であり、行政はその側面支援に回る予定であるが、他地域への普及推進策などについて、具体的に検討していくことが課題であると考えられる。	組織間調整の主要部分をNPOなどの地域内の主体が担えるような体制を構築していくことで、ある程度は左記の課題を克服できるものと考えられる。

7. 本調査(社会実験全体の取りまとめ調査)に向けた示唆

(1) 貴地区の「新たな共生・対流システム」の他地域への展開について

貴地区で進めている「新たな共生・対流システム」を他地域へ導入・普及することを検討した場合、どのような地域ならば導入が可能だと思いますか（導入の条件）。また、他地域へ導入・普及していく上で、どのような点が課題となると思いますか。

他地域での導入・普及にあたって必要と思われる条件	他地域への導入・普及にあたって考えられる課題
・参加・受け入れの両面にわたり、きちんと機能できる地元組織が存在していること。 ・上記の地元組織をきちんとコーディネートできる能力、言い換えれば、対応・調整能力を有する主体が存在していること（できれば、地元の主体として）。	・どのような取組を実施展開する場合でも、ある程度の費用がかかることになるものと想定されるので、その費用を誰がどのような方法で負担するのか、最大の課題になるものと思う。

以上

アンケート調査票

（第3回農水省検討委員会提出資料）

代表自治体名	富山県富山市
社会実験テーマ	～体験学習とボランティア活動を組み合わせた『出会い・交流の場』利用による地域内交流モデルの確立～

1. 本年度の社会実験調査の成果総括

本年度実施してきた社会実験調査の成果について伺います。成果の把握項目、把握状況、結果、結果に対する評価、結果に至った要因の考察について下記の表へ具体的にご記入ください。なお、各項目の記入に際しては、欄外の留意事項を事前にご一読ください。

分類	成果の把握項目 ¹	把握状況 ²	結果 ³	成果（結果）の評価 ⁴	その要因の考察 ⁵
定量的な把握事項	イベントの参加人数 イベント参加者が抱いた印象や感想	済 済	都市側：約 350 名 農村側：約 100 名 （計 4 回のイベントの参加人数） 同様の取組が、今後も継続された場合、再度参加したいかどうかを尋ねたところ、ほぼ全員が（準備作業等が過負荷にならないことを条件に）参加の意向を表明。	期待以上 期待以上 取組前の段階で参加人数や継続的な参加意向を、正確に予測していた訳ではないため、やや感覚的な評価である。	各団体の既存の取組に上乗せする方法でイベントを実施したことが効を奏し参加者が集まった。 「できることから、できる範囲で」かつ楽しく活動することを重視したことが効を奏し前向きな評価につながった。
定性的な把握事項	農村側の都市側に対する意識の変化。 都市側の農村側に対する意識の変化。 双方が双方の取組に参加することより生じた自らの地区の活性化に係る効果。	済 済 済		期待通り 期待通り 期待通り	都市側の生活環境等の状況を一定なりとも理解できたため。 農村側の生活環境等の状況を一定なりとも理解できたため。 本調査を契機として行われたイベントを自らの地区の年間事業の一つとして位置づけられたため。

1：成果の把握項目は第 2 回委員会事前アンケートでご記入いただいた内容をもとに記載しておりますので、適宜加筆修正をお願いします。

2：把握状況は「済（把握済み） 不（把握できず）」のいずれかをご記入ください。

3：結果は具体的な数値等をご記入ください。定性的な把握事項については記入不要です。

4：成果（結果）の評価は、当初想定していた成果（結果）に対して「期待以上 / 期待通り / 期待以下」のいずれかをご記入ください。

5：評価した結果に至った要因の考察をご記入ください（例：期待以上（期待以下）の成果が得られた（しか得られなかった）要因はどこにあるのか）。

2. 阻害要因の解消状況について

貴地区で想定していた「新たな共生・対流システム」の阻害要因とその解消方策、および解消状況についてご記入ください（下表は前回ご記入いただいた内容をもとに記載しております。空欄は適宜ご記入を、変更箇所は適宜修正をお願いいたします）。

	阻害要因 ¹	解消方策 ¹	解消状況 ²
情報面	農村側と都市側の相互の活動に対する興味や関心が希薄、情報が不足。 農村側の状況（過疎化により森林整備等の地域管理が困難）への都市側の理解が不足。 都市側の状況（川や海岸に流木等のゴミが散乱）への農村側の理解が不足。	農村側と都市側の双方が互いの立場や状況をきちんと認知・認識できるよう、調整機関のコーディネートにより、お互いに情報発信を行う。 双方が交流できるイベント・ボランティア事業等を企画・実施し、その中でお互いの状況の理解に努め、交流への意欲を高めていく。	全部済 一部済
時間面	大人はなかなか平日に時間が取れない。 子どもも参加した方が有意義であり、その方が取組内容も深まるが、平日では難しい。	大人も子どもも、ある程度フレキシブルに参加できる夏休みや日曜日を活用する。 子どもも最近は町内行事・スポーツクラブ等で行事が多々あり時間が取れない傾向にあるので、町内行事や各種団体の屋外レクリエーションを交流事業そのものにしていく。	未済 一部済
資金面	農村側と都市側の交流を進める際に必要となる原資が不足。そのなかでも調整機関のNPO等による自主運営に係るインセンティブが少ないため、特に困難である。	行政機関によるリソースの支援が必要となると思われる。	未済
その他	農村側と都市側と関係の深い公共セクター（例えば、農村側であれば市の農林水産部、都市側であれば市の○○部）が異なるため、公共セクターでのワンステップ化が求められる。	例えば農林水産部と環境部などの関連部署が連携した上で、円滑な体制が取れるよう、協議会など連絡調整組織確立と主務を努める事務局担当部署の確定が必要と思われる。	未済

1：第2回委員会事前アンケートでご記入いただいた内容をもとに記載しておりますので、適宜加筆修正をお願いします。

2：解消状況は「**全部済**（阻害要因すべて解消済み） **一部済**（阻害要因の一部は解消できたが、まだすべて解消できていない） **未済**（今後解消の見込みはあるが、まだ解消できていない） **不**（解消できておらず、今後解消できる見込みもない）」の4つの選択肢のいずれかをご記入ください。

3. 社会実験調査の取組による農産漁村側の行動・意識の変化について

「1」で把握された「共生・対流システム」の成果の他に、本社会実験調査の取組を経て、受入側の地域や住民の行動・意識にどのような効果・変化があったと感じですか。効果・変化があった場合にはその具体的な内容をご記入ください。効果・変化がない場合はその旨を明記してください。

農村側の特定の組織と都市側の特定の組織というように、当初より交流の主体を明確に定めたことが功を奏し、関連主体より都市農村交流に係る具体的な提案がみられるようになった（例えば、4回目の「喜楽里そば美食会」は、農村側より積極的に情報発信を図ったモデルケースである）。

また、これまで交流がなかった都市部と農村部が、それぞれのおかれた状況・問題点等を一定程度理解し、相互に尊重する機運が生まれてきたことが挙げられる。

これらにより、本モデル地区同士の交流については、今後も自立的に継続していく可能性が高いと考えている。

4. 貴地区の「共生・対流システム」の継続・定着に向けた課題

事務局では「共生・対流システム」を継続・定着させていくための課題として、現在のところ主に以下の9点を想定しております。貴地区の「共生・対流システム」を継続・定着させていく上で、これらの点は課題となっていますか。課題認識として強いものから3つまで「1」を課題認識の欄に、**その他課題として認識しているものには「○」を、課題として認識していないものには「×」**をご記入ください。

また、「1」「○」と回答した課題については、その解決の方向性について、下記の注釈の中から選択し、～をご記入ください。その上で、「国の支援、新たな制度などがあれば解決できる可能性がある」と回答した場合には、具体的にどのような支援、制度が求められるのか、具体的にご記入ください。

ポイント	課題 認識	解決の 方向性 ¹	国等に求める支援、新たな制度等
< A. 農産漁村側の受け入れ体制の改善拡充 >			
1. 地域内の人材・組織の有効活用	○		
2. 事務局体制の強化			事務局（調整機関）の運営経費支援
3. 受け入れにあたっての作業負担の軽減・分散			
< B. 共生対流システム(しくみ)の改善・拡充 >			
4. 地域資源（住居・農地・技術等）の発掘・確保	×		
5. 都市住民ニーズの把握	×		
6. 農山漁村側／都市側、両者の win の明確化	×		
< C. 都市側組織との連携 >			
7. 新規連携先の発掘・アプローチ	○		
8. 都市側組織の参加意欲を高めるインセンティブの明示	○		既存ボランティア支援事業（エコポイント）への深堀支援
9. 都市側組織との調整体制・役割分担の改善			

1：解決の方向性は、「農山漁村側の自助努力で解決できる可能性がある」「都市側組織との連携の改善によって解決できる可能性がある」「国の支援、新たな制度などがあれば解決できる可能性がある」「現段階で解決できる道筋は見えない」「その他」の5つの選択肢から選択してください。

5. 貴地区における今後の方向性

(1) 貴地区の次年度以降の取組予定について

貴地区では、「新たな共生・対流システム」の取組を次年度以降も行う予定ですか。あてはまるもの1つに○印をつけてください。

1. 次年度以降も取組を実施する	→ <u> </u> <u> </u> <u> </u>	2. 次年度以降は取組を行わない予定である	→ 下表に理由記入
3. 分からない	→ 下表に理由記入	4. その他	

【取組を実施しない/分からないを選択した理由】: 該当せず。

次年度以降の具体的な方向性

次年度以降も取組を実施する場合、具体的な方向性をどう考えていますか。以下から、あてはまるものすべてに○印をつけてください。

1. 民間主導で実施予定である（行政は資金面での支援は行わない）	2. 民間主導で実施予定である（市町村が資金面の支援を行う）
3. 民間主導で実施予定である（国等からの支援を活用する）	4. 行政主導で実施予定である（国の支援は活用しない）
5. 行政主導で実施予定である（国の支援を活用する）	6. 分からない

また、次年度以降、取組内容や体制を変更される場合、前回記入いただいた内容や理由について、下表を確認いただき、加筆修正をお願いいたします。

次年度以降の具体的な 取組内容・体制（変更点）	当該地区への委任が基本線、他地域への展開も含めて行政は側面支援。したがって、現時点では、具体的な共生・対流システムの導入手法や、取組の具体的な方向性に係る判断は、基本的に当該地区で交流を図るプレイヤーの属性や考え方により、規定される要素が大きいものと考えている。
変更の理由	本モデルの特徴である調整機関の設置の有用性は高く評価できると考えているが、リソースの不足を懸念しており、これらの体制整備を図りながら、今後の展開方法を検討する必要がある。次年度については、市の既存事業を活用しながら、当該地区の自立的な活動の高まりを側面支援するべく考えている。

6. 本社会実験調査を通じての所感

本社会実験調査の実施を通じて、今後の「都市と農山漁村の共生・対流システム」の構築に向けて、国等行政として取り組むべき事項等、お気づきの点がございましたらご自由にご記入ください。

他地域の成功事例やベストプラクティス等について、進んで情報発信していただけると、自らの地域の取組の参考の一助になると思う。

以上